

☆年間第15主日(7月10日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

### 第一朗読 (申命記 30章 10-14節)

(モーセは民に言った。) あなたは、あなたの神、主の御声に従って、この律法の書に記されている戒めと掟を守り、心を尽くし、魂を尽くして、あなたの神、主に立ち帰りなさい。わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。海のかなたにあるものでもないから、「だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。

### 第二朗読 (使徒パウロのコロサイの教会への手紙 1章 15-20節)

御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています。また、御子はその体である教会の頭です。御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、すべてのことにおいて第一の者となられたのです。神は、御心のままに、満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせ、その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。

## 福音朗読（ルカ 10 章 25-37 節）

そのとき、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。

「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

## 朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

一昨日、安倍晋三元首相が凶弾に倒れました。彼の評価についてはいろいろあると思いますが、少なくとも日本の国のために働かれました。慈しみ深い父なる神にその魂をゆだね、祈りましょう。

さて、今日は日本の政治の世界では参議院選挙が行われます。皆様の良心に従い、国民の務めを果たされますようにお勧めいたします。

今日のミサでは有名なたとえ話が読まれます。「私の隣人とはだれですか」という律法の専門家の問いに応じてイエスが話されたたとえ話です。良く知っているたとえ話だけにさっと読んでしまいがちですので、今日は一字一句、じっくりと黙想しながら読んでみましょう。きっと新しい発見があることでしょう。

### 第一朗読（申命記 30 章 10-14 節）

今日は申命記の言葉が読まれます。律法の書の最大の目的である「心を尽くして神を愛し、神に立ち返ること」が記されています。この言葉は今日の福音の中でイエスが語られたことに合致しています。そして申命記は続けます。この律法の戒めの言葉は難しいものではなくまた遠く力及ばぬものではなく、誰かがとってきて聞かせてくれるほどのものではなく、じつに私たちの身近に、私の口と心にあるのだから、それを行うことができる。よく考えてみれば、神は私たちに神の心を感じる心を与えてくださっているのです。私たちは神に対してなすべきことをもう知っているのです。神に立ち返る生活、それは決して私たちを裏切るものではなく、私たちが常に求めている生活に立ち返ることなのです。

### 第二朗読（使徒パウロのコロサイの教会への手紙 1 章 15-20 節）

「御子は、見えない神の姿である」とパウロは述べて、「宇宙万物の創造の前に存在した方」とであると主張しています。そして「王座も主権も」御子にあると述べて、この世界における御子イエスの絶対的な存在を示しています。ですから御子イエスはこの世の諸霊、諸存在の一部ではなく、御子イエスなくしてこの世は存在しないのです。それは父なる神の満ちあふれる力を現わしているからです。私たちはその御子イエスに繋がれた教会の一員であるのです。このような恵みを感謝せずにはおれないのです。



## 福音朗読（ルカ 10 章 25-37 節）

ある律法の専門家とイエスのやり取りです。マルコによる福音ではこの律法の専門家はイエスから「あなたは神の国から遠くはない」と褒められています。ルカによる福音ではイエスの返事に食い下がって、この有名なたとえ話を引き出していることになっています。どちらがどうということはありませんが、この律法の専門家のおかげで私たちは「私の隣人とはだれか」ということを、もっとよく知ることができるようになったのです。このたとえ話に出てくる登場人物を観察しましょう。一人の旅人、この事件の被害者です。追剥です。一人だったのか、複数いたのかわかりません。通りかかった祭司。この祭司は満ちの反対側を通過して去ります。レビ人。この人も道の反対側を通過して去ります。旅をしていたサマリア人。ユダヤ人からは軽蔑されて嫌われていた人たち。追剥にあった旅人に近寄り、薬を塗り、口バに乗せ、宿屋に行き介抱し、デナリオン銀貨二枚を渡して宿屋の主人に介抱を頼んだ人。そして、宿屋の主人。サマリア人に頼まれて追剥にあった人を介抱し続けた人。現代にはつらい目に遭っている人がたくさんいます。神に仕え、神を信じている人たちもたくさんいます。でも、反対側の道を通る人になっていませんか。一休さんの頓智によると「この橋(端)を渡るべからず」なのですが…。そして、私たちが軽蔑していたりしている人がつらい目に遭っている人を助けている現実。「私」はどこにいますか。何をしていますか。



**P.S.**

**もうすぐ？本格的な暑さがやってきます。感染症の第七波がやってきます。基本的な感染対策の徹底をしましょう。8月上旬にかけてエアコンの工事が行われる予定です。工事に大きな金額がかかります。修繕積立金に皆様のご協力をお願いします。**

**カトリック足立教会  
主任司祭 野口重光**